身近なエコを実践しよう「第11回うちこ発環境会議」

環境に優しい理想のまちを目指して「第11回うちこ発環境会議」（同実行委員会主催）が12月6日、内子町民会館で開かれました。

講演会の講師として登壇したNPO法人環境市民代表理事・枚本育生さんは、旬なものを食べることなど、すぐに実践できる簡単なエコ活動の例を挙げ「省エネは我慢ではなく、工夫が大切」と説きました。

続くワークショップでは自然エネルギーの活用など、内子町が取り組むべき環境活動について意見を交換しました。

「暮らしの中で取り組むエコ」をテーマに講演する枚本さん

自治会と連携した負傷者の応急手当と搬送の訓練

天神小学校で避難訓練 地域の人たちと避難行動を確認

「学校防災教育実践モデル地域研究推進事業」に取り組む天神小学校（山岡晋校長・児童181人）は12月2日、平岡・柿原・重松・東沖自治会と避難訓練を行いました。

地震を想定した1次避難と地震で池が決壊した想定の2次避難が行われ、教室外にいた場合の避難方法や災害時の役割分担などを確認しました。

平岡自治会長の田中光さんは講評で「私語で指示が聞こえなかった。移動はもっと速く歩かなければ」と指摘。災害時に的確な行動をとれるよう、一層気を引き締めました。

「気軽に文化講座.in内子」シンポジウムを開催

「気軽に文化講座.in内子シンポジウム～内子町とドイツの自然と文化～」（内子町教育委員会他主催）は12月13日、内子自治センターで行われました。

第1部では、愛媛大学法文学部人文学科観光まちづくりコースの学生たちが「内子町の文化資源の継承と活用」と題して発表。八日市・護国町並保存地区で行った民具展示と臼杵地区で行った生活文化の調査を事例に、文化資源を地域社会で共有・再評価することの重要性を考えました。

第2部では「ドイツ文化と森」と題し、愛媛大学教授の宇和川耕一さん、山本與志隆さん、同准教授・寺下太郎さんが講演。「森の国」と呼ばれるドイツの文化を例に、森と文化の関わりについて意見を交わしました。

1_学生の発表に耳を傾ける受講者　2_山本與志隆教授　3_宇和川耕一教授

危ないことには近づかない 町内の幼稚園児に安全教室

子どもたちが自らトラブルに気付き、対応できる力を身に付けることを目的とした「子ども安全教室」が12月16日、内子幼稚園で行われ、町内の全幼稚園の園児142人が参加しました。

大洲警察署員、各幼稚園の先生、内子町消費生活窓口の職員が安全に対する寸劇を披露。園児たちは「火遊びをしない」「インターネットのゲームでアイテムを買わない」など、危険に近づかないことを約束しました。白バイとパトカーの試乗もあり、園児たちは楽しみながら安全について学びました。

内子幼稚園の高松美栄子園長は「効果的な方法で身近な危険を再確認できた。子どもたちの生きる力を養う大切な取り組みなので、各幼稚園と協力しながら続けたい」と話しました。

1_うれしそうに白バイに乗る園児　2_工夫を凝らした寸劇で子どもたちを引き込む

代表で川本浩貴さんと中本菜々子さんが反射タスキを受け取る

ピカピカ作戦で交通事故防止 五十崎中に反射タスキを寄贈

五十崎ブロック駐在所連絡協議会（伊達祥一会長）は12月18日、五十崎中学校の全校生徒に反射タスキと自転車用の反射材を贈り、同中学校で贈呈式が行われました。

伊達会長は「帰宅が遅くなると夜道を通るため、交通事故に遭う危険が高まる。反射材を使って交通安全に心掛けてほしい」と願いを込めます。

式では大洲警察署岡村陽介交通課長の講話もあり、「交通事故は多くの人が不幸になる。反射材ピカピカ作戦で加害者にも被害者にもならないで」と呼び掛けました。

魅力ある地域づくりを考える「内子町自治会活動研究大会」

「平成26年度内子町自治会活動研究大会」（内子町教育委員会他主催）が12月20日、内子町共生館で開かれました。

大会は自治会関係者などが、地域づくりの原点や地域の未来に希望が持てる仕組みを学ぶことを目的に、2年に1回行われています。

今回は城廻・御祓・本川自治会が、コミュニティビジネスや廃校舎の活用などの活動を報告。また明治大学教授・小田切徳美さんが「地域の未来」と題し、若者に選択される地域をつくることの重要性を講演しました。

コミュニティビジネスとして、花の販売をしている城廻自治会の発表